

前回、Miviludes 委員会の報告から、天理教がフランスで布教するにあたり、教団組織の在り方、信仰や布教のアプローチ、病気の治癒において気をつけなければいけない点が見られたと書いた。具体的にどのようなスタイルがフランスに適合するのか考えてみたい。あくまでフランスで布教するにあたり私が感じている個人的な視点である。そして、それは教義や教理にとどまらず、日本的な精神文化の影響があることも補足しておく。

まず第一に、「さづけ」から考えてみよう。天理教の救済手段には「つとめ」と「さづけ」がある。「つとめ」はおそらくフランスにおける天理教布教の最大の課題で、今後の布教のありかたは「つとめ」にかかっているとさえ思っている。それは後に述べるとして、ここでは「さづけ」に着目したい。

野球で3割バッターといえは頻繁にヒットを打つように思うが、「さづけ」も十中八九どころか3回病気が治れば相当な確率であろう。しかし「さづけ」で、1割でも目に見える、体感できる治癒という結果が出ている人は現在のどのくらいいるだろうか。私の知る限りは、目を見張るような回復を感じられない人が多い。病気が治った後で「あの時のさづけで治った」という後付け的な感想をもつことはある。それを否定はしないし、事実その場合もあるだろう。だが、数打てばあたるを繰り返しても、行為の理解が不十分であれば、まやかしの手法をとっていると誤解されたりして非科学的とみられ、疑惑を持たせることにすらなりかねない。ちなみに「御供」についても同じことが言える。

そもそも「さづけ」の効果は神の御業であるから、失敗や成功という概念では推し量らない方がよいだろう。「さづけ」の祈りを受ければ体調がよくなると、さも成功を保証するように言うだけで意味づけを行わないのは、カルトに見られても仕方のない非常に危険な行為だと言えるだろう。

本来「さづけ」には「お諭し」つまり説教が必ず行われなければならないのだが、これが難しい。この「お諭し」を毎回丁寧に行う人は少なくなっているだろう。なぜなら、反省を促す話は高い確率でその人の悪い部分を想起させるからである。既出のカルトの見分け方の一番目「精神を不安定にさせる状態」を作り出してはいけないのである。痛みの原因はあなたの心遣いが悪いからだと言われれば、辛い思いをするに違いない。体の苦しみに心の苦しみを重ねて、二重苦を乗り越えろというやり方は過去にはよく行われたかもしれないが、今後はもう推奨されてはならないだろう。

私は現代の布教においては科学的なアプローチが必要であると思っているが、その意味するところは、強制や強迫ではない自由意思で思考できる状態を作り、主観的な自己体験に客観的な教理判断を経由させる態度である。ただ治りますよと暗示をかけようとするのはよくないと言いたいのである。「さづけ」には確かな効能があり、それを俯瞰的に知覚、認識する必要がある。医学をもってその加護の有無を証明すべきだと言っているのではない。盲信ではなく、冷静な視点を忘れてはならないと言いたいのである。

単に「さづけ」を取り次いだら神様が働く、という抽象的な気休めではない。「さづけ」には現実に体感できる事象がある。患部に触れる手の温かさ、静かに患部に向けた集中力、行為者と病人に生まれる間、集中力を高めるための呼吸、「さづけ」を受けた安心感、喜び、うれしさ、あるいは患部を意識することでより強く感じる痛みなど、実際に感じる感覚は人と場合によって違うだろう。しかし、その感じるという行為を精神活動に転化する方法が見えてこなければならない。「さづけ」は、取り次げば病気が治るという実にシンプルな教えだ。ならば当然、物質的な身体感覚をもっと研ぎ澄ますべきである。繰り返しになるが、実際の効果を医学や病理学で証明できるかどうかは問題ではない。感じ方とその解釈が正しいかも問題ではない。起こっている事象とそこから得られうる結果を、なんとなくではなく明確に理解し自覚することが大事である。「さづけ」は心の入れ替えを促し、病気の回復を目指すべきものだ。実感したものを明確に認知し精神活動に活かすことで、自らの体に宿る力をより能動的かつ確かに感じられるようになる。そういう前向きな精神状態を作り出せば、体の反応も良くなっていくに違いない。体の持つ地力を発揮させて治癒に向かう流れを生み出せる点が「さづけ」の真価と言えよう。

そこで大事になるのが、先に紹介した「お諭し」である。病人を心理的に追い込むのではなく、自発的に何かを感じてもらえるように促す「お諭し」が必要になるのだ。天理教では、人間の体の働きを十全の守護で説き分けている。この理解が「さづけ」実践の重要な鍵になるだろう。現在、この教えを使って病気を論ずることはあまり行われていないように思われる。しかし、十全の守護を改めて体感することで体の地力を呼び起こし、痛む箇所に活力を投入できれば、「さづけ」が多くの人の共感を得られる行為になっていくと考えている。

信仰の世界では、まったく言葉で説明できない不思議な奇跡が起こってもおかしくはない。そしてそれを期待することも悪いことではないだろう。ただ天理教の「さづけ」は奇跡的な治癒の期待ではないと理解している。そして、取り次ぐたびにご守護があると言うのであれば、上にあげたような視点は不可欠である。非科学的盲信を避け明確な意識下で効能を認識することができれば、「さづけ」で痛みが引かなくても、実感に応じて得られうる「さづけ」の効能を疑う必要はなくなるだろう。

19世紀以降のフランスは、科学の進歩とそれに頑強に抵抗する宗教の対峙の歴史でもあった。これは、自由に考えたい欲求と、思考を犠牲にしてでも従うべき伝統の対立にも思えた。ライシテの歴史を経た現代人には、もはや宗教への盲従はない。しかし、特にコロナ禍を経験した今、専門的な科学者同士の意見対立のはざままで苦しむことも多いはずだ。だからこそ、宗教を毛嫌いすることなく、自由意思を精神の強みに転換できる信仰の長所を科学の力と協同させることが大切になってくるはずである。「さづけ」はまさにその架け橋となりうるだろう。